

ヘーゲルの様相論

岡崎 秀二郎

1. はじめに

『大論理学』「現実性」篇、第二章「現実性」は、ヘーゲルの「様相」に対する思想が、最も明瞭に語られた記述であることは間違いない。そこでは、形式的 (formal)、実在的 (real)、絶対的 (absolut) という様相の三類型が三節に区分されて提示され、その各類型のもとで、現実性、可能性、偶然性、必然性の様相が特徴付けられる。『大論理学』のその他の箇所と同様に、この一連の記述の最大の特徴は、それがヘーゲル流の弁証法的展開を構成するものであるという点にあると言えよう。すなわち、ヘーゲルはこれら三類型のもとで四つの様相を単に機械的に羅列するのではなく、そのカテゴリー間の関係を明らかにすることにより、最終的に、ある種の統一を伴う様相理解を提示することを目指している¹。つまり、その叙述が最終的に辿りつくのは「絶対的必然性」という一つの概念であるが、「絶対的必然性は、総じて現実性と可能性とが、そして、形式的な必然性と実在的な必然性とが、立ち返る真理である」(GW11, 391)、とヘーゲルは考えている。

だが、この目的のゆえに、ヘーゲルの議論は、通常我々が「様相」論として思い浮かべるものから大きく乖離せざるを得なくなっているとも言えよう。通常、論理的に主題化される「様相」概念とは、少なくとも命題内容や発話された事態のあり方を、規定ないし分析するために用いられるものである。しかし、上記のように、ヘーゲルの様相論の最終的な目的は、そもそもいかなる意味で「絶対的必然性」が、諸々の様相が立ち返るべき概念であるのかを、弁証法的展開の結果として解明することにある。本稿は以下、形式的、実在的、絶対的というヘーゲルの様相の三類型を順に考察するが、その際、ヘーゲルが一貫して、特に「現実性」と「可能性」の二概念の関係に沿って、様相カテゴリー間の統一的关系を提示しようとしている点に、その様相論の特異性があることを示すことにしたい。

とは言え、このヘーゲル特有の問題設定の裏には、《絶対的に必然的な存在者》の理解をめぐる哲学史的な文脈が前提されている点も否定できない²。確かに、「現実性」章本論の記述の中で、ヘーゲルは、その哲学史的な文脈に自らの立場を位置づけはしない。だが、そこにはヴォルフやカントらの哲学史上の様相論を確実に

示唆する概念が、僅かながらも現れている。本稿は以下の考察を進める上で、そうした文脈依存的な諸概念を、ヘーゲル流の「様相」概念の論理的な意義を理解する糸口として用いつつ、最終的に「絶対的必然性」の概念において、ヘーゲルの様相論が、いかなる点で哲学的に特異な意味を持つことになるかを示したい。

2. 「形式的」様相

2. 1 「現実性」によって補完されるものとしての「可能性」の定義

ヘーゲルが最初の様相の類型として導入するのは、「形式的」な様相である。ここでまず「現実性」は、「存在ないし現実存在一般 (*ein Seyn oder Existenz überhaupt*) 以上ではないもの」と定義され、加えて「可能性」についても、「現実性は、即自存在または可能性を直接に含んでいる」(GW11, 381)、と規定される。最初に触れたように、ヘーゲルの議論の最大の特徴は、これら「現実性」と「可能性」の定義とともに、両者の二つの関係性の整理が次のように与えられる点である。つまり一方で、可能性は「自己へと反省した現実性である」という点で、「[WM³] 第一に、自分自身へと反省した存在であるという肯定的契機」(GW11, 381)を含んでいる。それは例えば、或る鋭角三角形が現に存在するのは、そもそもその形の三角形が可能だったからであるとして、我々が反省的に捉え返す関係に当たる。しかし他方で、「[MW] 第二に、可能性は欠陥を持っており、他者、つまり現実性を指し示し、現実性により補完されるという否定的な意味を持っている」(GW11, 382)。つまり、可能性は、それだけでは現実に存在するものとは言えないという点で、現実性によって補完されるべき欠陥を持つという否定的側面を伴っている。

これら一連の定義に用いられている概念が示唆するように、ヘーゲルがこの類型で念頭に置くのは、伝統的な形而上学の様相論と見て良いだろう。特にヴォルフの存在論においては、「現実性 (*actualitas*)」としての「現実存在 (*existentia*)」は、「可能性の補完 (*complementum possibilitatis*)」という概念を通じて定義された (cf. *Ont*, §173)。それというのもヴォルフやバウムガルテンにとっての「可能性」は、或る存在が現実に存在するかどうかにかかわらず、その論理的可能性、言い換えればそれが論理的な矛盾を含まないかどうか、という点からのみ定義されるからである (cf. *Ont*, §85 ; *Meta*, §7)。つまり、ヘーゲルの表現では、こうした「形式的」な意味で「可能的」であるとは、「自己に矛盾しないすべてのものが可能的である」(GW11, 382) という、論理的無矛盾性のみを意味している。この時、上に整理されたように、「可能性」は、或る現実的存在を基準として「自己との同一

性」を帯びるようにして捉え返される肯定的側面 (WM) を持ち⁴、そして他方で、その「可能性」自体は、論理的に無矛盾なものを等しく可能的なものとして含む点で、「あらゆるものを入れるための、相関を欠いた無規定的な容れ物」(GW11, 382) に過ぎない、という否定的側面 (MW) を持っている、と言えるだろう⁵。

2. 2 論理的可能性の理解に基づく、「偶然性」と「必然性」の定義

前節のように、例えば或る三角形が、鋭角三角形でもあれば鈍角三角形でもあり得るように、互いに無規定的で相関を欠くその多様な形は、それぞれが等しく「可能的」と言える。つまり、「或る内容は一つの可能的な内容に過ぎないのであるから、また同じく或る他の内容や、それと反対のものも可能的である」(GW11, 383)。逆に、《二つの直角を持つ三角形》のように、何らかの存在が「不可能」であるとは、そこに含まれる内容が互いに矛盾する場合である。つまり、「一つの可能的なもの [可能的なA] の内に、自らの他者 [可能的な非A] も含まれているという、この関係としてはしかし、可能性は、自らを廃棄する矛盾である」(GW11, 383)。この「可能性」の論理的定義に基づき、ヘーゲルは次の様相、「偶然性」を特徴づける。つまり、形式的可能性とは、「単なる可能性」であり、「可能性はまだ全ての現実性である訳ではない」、そして、「偶然的なものとは、同時に単に可能的なものとして規定された現実的なものであり、つまり、その他者ないし反対のものが、全く同様にそうある [可能的なものとして規定されている] という、現実的なものである」(GW11, 383)、と定義される。換言すれば、或る三角形にとってそれが直角三角形であることは単に一つの可能性に過ぎず、そこに同時に直角三角形ではない可能性が許容されている点で、それは偶然的存在者である。ここにも、やはり古典的な偶然性の定義、例えばバウムガルテンの、「必然的であるとは、その反対のものが不可能であることであり、必然的でないものは偶然的である」(*Meta*, §101)、という定義が基礎にあることは間違いない。

そしてヘーゲルはこの「偶然性」に、「可能性」と同様に二側面があることを、次のように指摘する。「[WM*] 第一に偶然的なものは、それが可能性を直接的に自らのもとに持つ限りでは [...], 直接的な現実性である」が、「[MW*] しかし、第二に偶然的なものは、単なる可能的なものとしての、つまり定立された存在としての現実的なものであり、[...] それゆえ [現実的なものと可能的なもの] 両者は、その真の自己内反省を、或る他者の内に持っている」(GW11, 384)。つまり、一方で偶然的なものは、一つの可能性が現実的になったものとして、自らの可能性を直接的に含む現実的存在である (WM*)。だが前段落で定義されたように、

その可能性が偶然的な仕方では現実的になったと言えるのは、当の可能性が一つの可能性に過ぎなかったから、つまり、自己に対立する別のものが等しく可能的だったからである。ゆえに、「単なる可能性」が現実的になったとする反省は、その根拠を当の可能性とは別の、「或る他者の内に」持たねばならない (MW*)。

ヘーゲルは、こうして可能性及び現実性が、一方で直接的な「現実存在一般」(WM*) であり、他方で「単なる一つの可能的なもの」(MW*) であるという、「二つの規定が[交互に]生じるこの絶対的な非静止が偶然性である」(GW11, 384)、とまとめる。最後に、「形式的必然性」は、この「偶然性」との連続性から定義される。つまり、古典的形而上学では「必然性」とは、或る存在の反対のものが不可能であること、つまり当の存在が、唯一の可能的なものであることを意味する。とすれば「必然性」においては、上記の二規定 (WM*及び MW*) は、同じ一つの存在者を指さねばならない。ヘーゲルの言では、上記の「それぞれの規定が、対立している規定において同様に端的に自己自身と合致するのであり、そしてこれら両規定の、一方の他方におけるこの同一性が、必然性なのである」(GW11, 384)。こうして、「形式的」様相における「必然性」の概念が、「現実性」「可能性」「偶然性」を貫く二つの規定が合致するところに生じるとする限りにおいて、この必然性の中に、「形式的」な各様相概念間の連関と統一とを見ることができる。

3. 「実在的」様相

3. 1 カントの可能的経験の原理に見られる「様相」論

「形式的」様相では、無矛盾であればいかなる内容も可能的であった。続く「実在的」様相でヘーゲルは、「多様な内容一般」としての「現実性」を「実在的現実性」と呼びつつ、その内容自体を主題化する。ただし、ここでも議論は、文脈依存的な概念を通じて始まる。つまり、「実在的現実性そのものは、さしあたり多くの特性を持った物 (Ding)、現実存在する世界 (Welt) であり」、「現実的であるものは、作用する (wirken) ことができ、或るものはそれがもたらすものを通じて、自らの現実性を告示する」(GW11, 385f)。つまり端的に言えば、「実在的現実性」とは、或る結果 (Wirkung) をもたらす「可能性」を自らの内に持つ存在であり、よりはっきり言えば、認識主体に働きかける、「物」ないし「世界」として定義される。これら一連の概念が示唆するように、ここでヘーゲルが念頭に置くのは、カントの「様相」論であると見て良いだろう。まず「実在的可能性」の概念に関して無視し得ないのは、『純粹理性批判』『純粹理性の理想』の以下の言明である。

概念は、それが自己矛盾しない時は常に可能である。これは可能性の論理的徴表であり、それにより概念の対象は否定的無から区別される。しかしにも関わらず、概念は、それを産出する綜合の客観的實在性が特に立証されない時は、空虚な概念になり得る。しかし先に示された通り、その綜合の客観的實在性の立証は常に、分析の原則（矛盾律）ではなく、可能的經驗の諸原理に基づいている。これは、概念の（論理的）可能性から直ちに物の（實在的）可能性を推論してはならない、という警告である。（KrV, A596/B624, Anm.）

ここで主張されているのは、或る概念が論理的に可能であっても、それが空虚な場合があるという点である。そして、概念が対象を持つには、それに対応する「物」の「實在的」可能性が必要であり、その「物」の存在は、「可能的經驗の諸原理」に基づいて、「綜合の客観的實在性」が立証されることで可能的になるとされる。

ではこの「可能的經驗の諸原理」とは何を意味するのか。カントはそれを、「超越論的分析論」、「經驗的思考一般の公準」の中で、自らの「様相」論に即して予め示している。すなわち、その第一公準によれば、「經驗の形式的な諸条件（直観及び概念に関する）と一致するものが可能的である」とされる（KrV, A218/B265）。例えば、或る三角形がその概念の無矛盾性のゆえに可能的であるとしても、それが「物」として可能であるには、直観形式である「空間」において構成され得るものでなければならない。更にこの可能性の定義を踏まえた第二公準によれば、「經驗の實質的条件（感覺）と連関するものが、現実的である」（KrV, A218/B266）。この公準で要求されているのは、「その対象の現存在と何らかの現実的知覚とが、經驗の諸類推に従って連関していること」（KrV, A225/B272）、である。例えば鉄粉の引きつけられる動きの知覚から、磁気が現実に存在することが認識されるように、「物」が現実に存在すると言えるには、その現実存在と我々の何らかの感覺与件とが関連していなければならない。最後に、第三公準によれば、その「現実的なものとの連関が、經驗の普遍的な諸条件に従って規定されているものが必然的である（必然的に現実存在する）」（KrV, A218/B266）。カントはこの公準について、続く箇所では、「所与の他の現象の条件のもとに必然的なものとして認識され得る現存在とは、所与の原因から因果法則に基づいて生じた結果（Wirkung）の現存在に他ならない」（KrV, A227/B279）と説明し直している。つまり、或る現実存在が原因としてあり、それとの間に因果的連鎖を見出し得る現存在を、我々は必然的に存在するものと認識する。以上のように、「物」の實在の様相は、その対象の經驗

を認識主体が持つ上での、形式的・実質的・普遍的条件に基づいて定義される⁶。

3. 2 結果をもたらす「可能性」を持つものとしての「現実性」の定義

前節のように、実在的「現実性」とは、或る結果を認識主体にもたらす「可能性」を内に含むものと定義される。この時、ヘーゲルが述べるように、「一つの事柄の可能性をなしているこの現実性は、それゆえにその現実性自身の可能性ではなく、或る他の現実的なものの即自存在〔つまり可能性〕に他ならない」(GW11, 386)。つまり、或る事柄の現実存在に含まれる実在的「可能性」とは、原因の事柄とは別のものを結果としてもたらす「可能性」として理解される。その原因と結果の連鎖が、可能的経験の諸条件を満たしつつ我々の現実的知覚と連関する時、当の事柄は「現実的」に存在する。ヘーゲルの言では、「或る事柄の全ての諸条件が現実存在している場合には、その事柄は現実性へと歩み入る」のであり、それゆえ、「こうして実在的可能性をなすのは、諸条件の全体である」(GW11, 387)。

以上の「現実性」と「可能性」の定義を踏まえ、続いてヘーゲルはやはり両者の間の二側面を、「形式的」様相と同様に整理する。つまり、第一に「[WM] 現実性は、自立的で直接的な現実存在として現れ、それが廃棄されることを通じて反省された存在に、つまり或る他者の契機となり、それにより自らのもとに即自存在を獲得する」(GW11, 387)。例えば、磁気は現実存在するだけでなく、鉄粉等他のものを動かす契機としては、それ自身のもとに即自存在、つまり「可能性」を獲得する。そして第二に、「[MW] この即自存在は、或る他者の即自存在として規定されている」ために、「この即自存在もまた廃棄され現実性へ移行する」

(GW11, 387)。例えば、現実存在する磁気を持つ可能性は、鉄粉の動きという、現実に知覚される「他者」へ移行する。以上の整理に基づけば、「形式的可能性」に見られた現実性と可能性の間の二側面(WM及びMW)と同様に、「自らを廃棄する実在的可能性の運動によって生み出されるのは、これらの既に現存している二契機であり、それぞれの契機が他方の契機から生じるに過ぎないがゆえに、その運動は[...]自己自身に合致する運動である」(GW11, 387)、とまとめられる。

ただし、形式的可能性と実在的可能性の違いは次の点にある。つまり前者においては、単なる一つの可能的なもの(A)と、自らの他者の可能性(非A)との間の論理的両立性が問われたのに対し、後者の「実在的可能性は、そのような他者を、もはや自己に対立させてはいない」(GW11, 387)。というのも実在的可能性とは、既にそれ自身、別の現実性の「可能性」であるからである。つまり、「実在的可能性の直接的現実存在[...]が廃棄されるとしても、それにより実在的可能性

は、既にそうあるところの即自存在、つまり、或る他者の即自存在になる」(GW11, 387) に過ぎない。そこで問題になっているのは、可能的なもの間の論理的関係ではなく、可能的なものが成す実質的な《連関》が存在するかどうか、である。

3. 3 「必然性」が伴う前提としての「偶然性」の定義

前節のように、我々が実在的に必然的なものと認識するのは、因果連鎖に基づき生じた結果であり、その連鎖は、実在的可能性の二契機 (WM'及びMW') が交互に生じることで担保される。だが同時にこの両契機の転倒によって、「実在的可能性」は「自己を廃棄する可能性」(GW11, 387) になる、とヘーゲルは主張する。と言うのも、或る現実存在を原因とし、因果法則に基づき或る結果が現実存在するということは、その結果に至る「可能性」の連関の全ても同様に現実存在している、つまり可能性であることを止めているからである。この事情をヘーゲルは、「実在的可能性の自己との同一性が、実在的可能性の否定である」(GW11, 388) と表現しつつ、そこでもたらされる同一性を「実在的必然性」と定義する。それゆえ実在の様相でも、「別のものであることができない」という必然性の様相は、別のものであり得る「可能的であるもの」の構造を基準に理解されると言える。

だがなぜその「可能的なもの」は、そもそも別のものであり得たと言えるのか。この点についてヘーゲルは、次の様相、「偶然性」を導入しつつ、やはり可能性の二側面から整理している。つまり、第一に「[WM''] 多様な現実存在は、直接的ないし肯定的に、可能性である」が、第二に「[MW''] 現実存在のこの可能性は定立されているのであり、その限り、単なる可能性として規定されている、つまり、現実性が自らの反対のものへ直接的に転化するものとして、換言すれば、偶然性として [規定されている]」(GW11, 388)。第一の側面 (WM'') は、既に見た、現実性から可能性への「自己内反省」(WM') に対応する。問題は、なぜ第二の側面 (MW'') において、「単なる可能性」が、「自らの反対のもの」に転化するのか、という点である。その理由はこの文では、その可能性が、「定立」ないし「規定」されている点、あるいは、ヘーゲルのよりはっきりとした表現で言えば、それが「制限された現実性」(GW11, 389) であるという点にある、とされている。

ではなぜそうした「規定され」、「制限された」現実存在の「可能性」は、自らの反対のものへ転化する「偶然性」であると言えるのか。この実在的な「偶然性」の理解は、既に前批判期のカントが、『神の現存在の唯一可能な証明根拠』で提示したものと重なる。つまり、「論理的意味」での「偶然性」とは異なり、「実質的意味では、その非存在が思考可能なもの、つまり、それを廃棄してもあらゆる思

考可能性が廃棄されないものが、偶然的である」(II, 83)。言い換えれば、実在的な「偶然的」存在とは、その思考可能性が廃棄された場合でも、それとは別の可能性を考え得るものとして定義される。と言うのも、カントが付言するように、「偶然的」存在の内には、「一切の思考可能性に対する実質が与えられている訳ではない」(II, 83)からである。ヘーゲルの理解では、現実存在がこの意味で「規定され」、「制限された」ものであるがゆえに、そこに含まれる「可能性」が廃棄されたとしても、新たな別の「現実性」が生じ得ることになる。すなわち、「この直接的存在が規定性として[あることで]、実在的に現実的なものはその否定的なもの、つまり、[他の現実的なものの]即自存在ないし可能性でもある」(GW11, 389)。すると上述のように、確かに実在的可能性が因果的連関に基づいて必然性になるとしても、その連関は偶然的な存在を出発点とせざるを得ないことになる。

4. 「絶対的」様相

4. 1 カントにおける「実在的」様相と「絶対的」様相の関係

ヘーゲルは以上の考察を踏まえ、「絶対的」様相を提示する試みへと移る。その時まず意識されているのは、実在の様相との連続性である。前節のように、実在的必然性は、規定された「偶然性」を前提とする。ヘーゲルの言では、ここに既に、「必然性と偶然性との統一が即自的[潜在的]には(an sich)存在するのであり、この統一を絶対的現実性と名付け得る」(GW11, 389)。「絶対的」様相が「実在的」様相に基礎を持つとするこうした想定を理解する上でも、やはり前批判期のカントの考えを無視することはできないと考えられる。と言うのも、そこでカントは前述のように、一方で「それを廃棄してもあらゆる思考可能性が廃棄されないものが、偶然的である」(II, 83)という「実在的偶然性」を、「それを廃棄ないし否定すると、あらゆる可能性が消滅するものは、絶対的に必然的である」(II, 83)という、「絶対的な必然性」の概念との対比で提示しているからである。

この『神の現存在の唯一可能な証明根拠』の様相論の目的の一つは、或る存在者が「制限された」可能性を持つかどうか、という実在的基準から、「必然性」の伝統的定義に内実を与えることにある。例えば、「三角形が直角を持つ」という命題は偶然的であるが、伝統的にはその根拠は、その反対が論理的に可能的である点に求められる。だが、カントによればその根拠の実質は、「直角を持つ」可能性が、三角形が伴う可能性の全てではない、つまりそれを廃棄しても別の可能性が残る点に求められる。逆に、一切の思考可能性の実質を含む「絶対的に必然的」

な存在者とは、その反対が全ての思考可能性を廃棄するがゆえに、その非存在自体が「端的に不可能 (schlechthin unmöglich)」(II, 83) なものである。この時点でのカントは、この意味での「端的に必然的な存在 [本質] (schlechthin notwendiges Wesen) が、現に存在する」、つまり、「それを廃棄すれば、全ての内的可能性が総じて廃棄されてしまう、ある種の現実性が存在する」(II, 83) と想定する。

『純粋理性批判』のカントも、この前批判期の「必然性」概念をあくまで維持している。すなわち、三角形が偶然的に直角を持つのは反対に、「三角形は三つの角を持つ」という命題は端的に必然的である」(KrV, A593/B621)。と言うのもその場合、「三角形」に対する「三つの角」は、「絶対的必然的な存在者の概念」の場合と同様に、「その現存在を除去すると」、「物そのものをその全ての述語とともに除去してしまう」(KrV, A594f./B622f.) からである⁸。前批判期との決定的な相違は、ここでカントがこの「三角形」と「絶対的必然的な存在者」の間に、明確な線引きを行っていることである。つまり実際には、「三角形は三つの角を持つ」という命題の必然性が意味するのは、「三角形が現に存在する (与えられている)」という条件のもとでは、三つの角も (その内に) 必然的に現にある」(KrV, A594/B622) という関係である。換言すれば、或る物の実在的必然性は、「私がこの物を与えられたものとして (実在するものとして) 定立するという条件」のもとで担保される必然性を意味し、その物与えられ方は、あくまで可能的経験の原理に制約される。対して、「(あらゆる関係において妥当的である) 絶対的な可能性」の概念は、「[概念の] 可能的な経験的使用の全てを超越した、理性にのみ属する」(KrV, A232/B285)。さらに、「絶対的に必然的な存在者の概念」は、「理性がそれを要求するだけでは未だ到底その客観的実在性が証明されていない、理念に過ぎない」(KrV, A592/B620)。こうして最終的に「実在的」な様相は、カントのもとで、経験的に制約された様相と「絶対的」様相とに峻別されることになる。

4. 2 「絶対的」な「現実性」と「可能性」の相互的廃棄

まずヘーゲルの「絶対的必然性」の概念には、前節のカントの理解を引き受ける形で、「端的に必然的なもの (das schlechthin Notwendige)」(GW11, 391) という特徴が与えられている。「三角形」の存在が現にある場合に、その本質である「三つの角」がもたらされる関係と同様、その必然性は簡潔に言えば、「自らの否定であるところの本質の内で、自己に関係していく存在」であり、また、「存在が自らに合致していくものとして、それは本質である」(GW11, 391)、と定義される。こうして、「三角形」に対する「三つの角」のように、「存在」の可能性の全てが「本

質」に含まれるという点で、「端的に必然的なもの」においては「その可能性がその現実性である」という、存在と本質の、また現実性と可能性の「単一な同一性」(GW11, 391)が成立していると言える。前述のように、まずヘーゲルの議論は、この絶対的様相に対する実在的様相の連続性を明示することに向けられている。

すなわち、前節終わりのように、「実在的必然性」とは、「制限された」現実存在を前提する点で「規定された必然性」であり、次のような二側面を伴っていた。第一に、「[WM†] この規定性はしかし、その最初の単一性においては、現実性である」(GW11, 389)、つまり、この必然性の連関は、直接的に与えられた現実存在から始まる可能性の連関であった(WM^{''})。そして第二に、前提された「[MW†] この現実性は偶然性である」、つまり、前述の第二の面(MW^{''})と同様に、「この現実性は単なる可能性に、つまり別様にもあり、また可能的なものとして規定され得るものになる」(GW11, 389)。ここには実在的偶然性に対応する二契機(WM†及びMW†)が存在しているが、前述のように、同時にそこには、必然的連関の内にある限りで、結果に至る「可能性」の全てが現実存在するという、「可能性」と「現実性」の同一性が存在している。例えば、必然的に現実化する因果的連関を前提する限り、或る磁気が現実存在することは、鉄粉が動くという一定の現実的知覚をもたらす可能性をその磁気を持っていることと同義であると見なせる。

実際、カントは規定性ないし述語の観点からは、「現実存在するものの内には、単に可能的であるものに比べて何一つ余分なものは定立されていない」(II, 75)というこの想定を、批判期まで維持する⁹。だが次にヘーゲルが指摘するのは、カントの意に反してここには既に、「現実性」と「可能性」の区別それ自体が喪失する問題が潜んでいる、という点である。つまりこの時、上記の二側面は次のように読み替えられる。まず、実在的偶然性の第一の面(WM^{''})に対応する側面(WM†)では、直接的に与えられる現実性は、本来は他の現実性をもたらす「即自存在」に移るが、そこでもたらされるものは必然的な連関それ自身である。それゆえ「即自存在とは、可能性ではなく、必然性そのものであり、こうして、必然的連関に従う可能性のみを含むことで、「もはや別様ではありえない」現実性を、ヘーゲルは「絶対的現実性」(GW11, 389)と定義する。それに応じて第二の側面(MW†)でも、「実在的必然性」が前提した「単なる可能性」は、「可能性でありかつ現実性でもあると規定される可能性である」(GW11, 389f.)、と把握し直される。こうして、現実的経験をもたらさない可能性はないという点で、「単なる可能性」は常に妥当な「絶対的可能性」(GW11, 390)と定義される。ここには「現実性と可能性との統一」が存在するが、しかしそれは同時に、「[WM†]「現実性」が空虚な

(*leer*) 規定に過ぎなくなり」(GW11, 389)、「[MW†] 可能性」も、「空虚で偶然的な規定として定立される」(GW11, 390)、という事態を含意することになる¹⁰。

4. 3 「偶然性」の生成と「絶対的必然性」

以上の整理によれば、「実在的」必然性は既に、「絶対的現実性」と「絶対的可能性」の、「一方の契機の他方への転化」(GW11, 390)を潜在的に含む。だが同時に、「実在的」様相の根底にあるカントの想定には、「現実性」と「可能性」の規定自体が空虚になるという問題が潜むことになる。仮にその両者の区別が喪失するのであれば、カント自身その実質の解明を目指した「形式的」様相の、二契機の意味自体失われる。この時我々が取り得る選択肢は、「形式的」様相に内実を与える別の基礎付けを見つけるか、あるいはカントの「実在的」必然性の想定を維持しつつ、「実在的」様相の二契機が成す意味を確保するか、のいずれかであろう。ヘーゲルの「絶対的必然性」の残る議論は、この後者の道を取るもの、しかも前述のように「端的に必然的なもの」の概念を導く形でそれを試みるものと解せる。

まず前節の議論を繰り返せば、「実在的」必然性では、偶然的存在として前提された「磁気」の現実性が、「鉄粉の動き」をもたらず可能性と同一視されていた。だがこの時、磁気の《規定的な現実存在》の内に「現実性」と「可能性」が空虚に統一され得る理由は、その磁気の現実存在が、因果的連関が生成する過程から切り離された形で「前提」されているからである、と言える。つまり、「純粹理性の理想」におけるカントの例に即してヘーゲルが述べるように、百ターレルについて「可能的なものが現実的なもの以上のものを含まない」と言えるのは、「その規定された内容から、他の内容とのその連関が取り去られ、その内容だけが孤立されて思い浮かべられている」(GW11, 46)からに他ならない¹¹。だが実際には、孤立して「前提」された偶然的な磁気の現存在とは、それが伴う必然的連関と、更にはそこでもたらされる認識主体の一定の知覚と、不可分に生じるものの筈である。であれば、ヘーゲルの表現では、「実在的必然性は、ただ即自的 [潜在的] に偶然性を含んでいるだけではなく、偶然性が実在的必然性のもとに生成しもある」のであって、「この [偶然性の] 生成は、実在的必然性そのものの生成であり、換言すれば、実在的必然性が持っていた [偶然性を] 前提するということは、実在的必然性自身を定立するということである」(GW11, 390)、と言うべきである。

カントの実在的様相に沿って展開されてきたヘーゲルの議論は、ここでむしろ、「必然性」が生成する過程自体を分析する方向へと転換する。すなわち、「前提」されると考えられた現存在が、実際には何らかの可能性の連関と不可分に生成す

るものとして把握される時、ヘーゲルはこの現実性を、「自らの否定〔可能性〕によって媒介されたものとして規定されている」(GW11, 390)、と特徴づける。つまり、例えば或る規定的な「磁気」の現存在が、導線に流れる一定の電流や、特定の磁性物質に伴われていた「可能性」が現実化したものであり、それが再び一定の知覚をもたらす「可能性」に移るように、実在的必然性の中で生成する過程とは、定立された偶然的存在が廃棄されつつ、新たな存在の定立に向かうことで、定立された存在を《可能性が媒介する》過程と言える。ヘーゲルの言では、「それゆえこの可能性とはしかし、直接的には、この媒介すること (*Vermitteln*) そのものであり」、「必然性とは、この定立された存在の廃棄であって、それがつまりは、直接性及び即自存在を〔新たに〕定立するということである」(GW11, 390)。

この想定に立てば、この連関の中で定立される存在が制限を伴う偶然的なものではない限り、その存在の規定性(例えば一定の磁気)は、それを「媒介」する必然的連関、そしてその連関の内の他のもの(一定の電流や知覚)を通じてしか規定され得ない。換言すれば、その必然的連関とはむしろ、可能性による「媒介」の中で廃棄される存在を、「〔偶然的に〕定立された存在として規定する当のものであり」、また「必然性とは、自己を偶然性として規定する当のものである」(GW11, 390)。つまりカントの想定とは逆に、必然的連関の中で定立される存在は、それが偶然的に与えられる限り、その存在が規定的な関係を持つ「他のもの」から決して孤立させて考え得ない、というのがヘーゲルの直観である。そして、こうして「規定された」必然性が、実際にはその規定性を介して広がり得る連関から切り離して考え得ないとすれば、その必然的連関の構造を、「その現実性がその可能性へ、またその可能性がその現実性へと絶対的に転倒する」という、完結した「絶対的同一性」(GW11, 391)として把握できるのは、「端的な必然性」の構造、つまり、自らが定立する「本質」の内にその可能性の全てを含むような「存在」であるという、「絶対的必然性」の構造を通じてでしかない、と言えらるう。

5. 結論に代えて

以上のように、ヘーゲルは様相概念の弁証法的展開に基づき、最終的に「絶対的必然性」の概念を与える。結論に代え、こうして導かれたこの概念の特徴を素描し、本稿を閉じることにしたい。ヘーゲルの議論は基本的に、形式的様相の、現実性の可能性への自己内反省(WM)と可能性から現実性への移行(MW)を基準に構成されている。ヘーゲルは各様相の類型において、これら両契機が合致す

る様相を「必然性」と定義する。そこには、「現実性」と「可能性」の重なりを見るヴォルフ、カントらの「必然性」概念を、自らの「絶対的必然性」の概念により基礎付ける意図が存在していると言うことができるだろう。以上の両契機が形式的・実在の様相を貫徹し、その統一から「絶対的必然性」が導かれた点に、本稿はじめの言葉で言えば、「総じて現実性と可能性とが、そして、形式的な必然性と実在的な必然性とが、立ち返る真理」とも言い得る特徴を見ることができる。

だがこの概念には不明瞭な点も残る。ヘーゲルの議論では実在的な必然性の連続と連続する形で「絶対的必然性」を見出せる筈であり、その主張がカントとの大きな違いをなしている。だが少なくとも「現実性」章の記述では、実在的な必然性が伴う規定的な可能性の全てを含む「端的に必然的なもの」は、形式的・実在の様相が成立するための一種の論理的要請に過ぎない。その限りヘーゲルの議論は、「絶対的に必然的な存在者」を「理念」と位置付けたカントと変わらないとも言える。この点で、ヘーゲルの「絶対的必然性」概念が、具体的にいかなる「絶対者」観を背景に持つのかという問題は、その概念を理解する上で欠かせない問いである。本稿はこの問いを将来に残しつつ、ここで考察を終えることにしたい¹²。

¹ Cf. Emundts 2018, 421f.

² 「現実性」章直前の註解で批判が加えられるのは、まさにスピノザ、ライプニッツの「絶対者」観である。「現実性」篇全体がスピノザ主義論駁を一つのモチーフとすることは、既に Schmidt が指摘している (cf. Schmidt 1997, 178, 182)。ただし Emundts がまとめるように、「現実性」章に関しては、「根拠」論との関連からライプニッツ主義との対峙を見る解釈が主流であり、スピノザ主義論駁を見る解釈は Knappik 等ごく限られる (cf. Emundts 2018, 397, 415)。

³ ヘーゲルは様相論全体にわたり、この現実性 (Wirklichkeit) から可能性 (Möglichkeit) への反省と、可能性から現実性への移行の二側面を、基本的二契機と見ていると考えられる。そこで本稿は整理のため、前者を“WM”、後者を“MW”と略記する。この見方は、「現実性」や「可能性」の規定自体がその契機を成すと考える高山や Emundts から従来解釈とはやや異なる。

⁴ この WM と MW の二側面が伝統的形而上学の内、特にヴォルフを念頭に置くという Knappik の見方を本稿は支持する (cf. Knappik 2015, 55f)。無矛盾性としての可能性概念に基づき様相論を構築する「論理主義 (logicism)」の立場は、確かにライプニッツ、バウムガルテンにも帰し得る (cf. Stang 2016, 19)。だが、ヘーゲルがここで整理するように、「あらゆる現実性が可能的である」という意味の、現実性と可能性の同一性、つまり「共外延性 (coextensiveness)」テーゼを明示するのは、ヴォルフのみだからである (cf. Ont. §170; Abaci 2019, 202)。

⁵ ここで定式化されているのは、所謂「汎通的規定」の問題と見て良いだろう。やはりヴォルフは、この汎通的規定を或る個体が現実存在する上での必要条件と考える (ヴォルフの汎通的規定の理解に対する諸解釈については、手代木 (2018, 188-192) を参照)。逆に言えば未規定性を残す可能性は、現実存在するための条件を欠いた《単なる可能性》に等しい (cf. Ont. §226)。対してバウムガルテンはこれを現実存在の十分条件と解する (cf. Abaci 2019, 202)。

⁶ 『純粹理性批判』で様相論が扱われる主な文脈は、本節最初の「純粹理性の理想」に加え、「形而上学的演繹」、「図式」論、そしてこの「経験的思考一般の公準」である。滝沢 (2018) は、この内の後の三カ所に限定してその様相論の認識論的側面をまとめている。

⁷ ここにはヘーゲルが重視するスピノザ主義的な「全て規定は否定である」という原理も見出し得る。事物の規定的否定性の構造を様相概念が顕在化させるこの点には、現代の表現主義との

類似性も見出せる (cf. Emundts 2018, 388; Brandom 2015, 200)。ただし、この意味の否定性は依然として、Melamed が整理する相互的否定 (mutual negation) の意味に止まり (cf. Melamed 2015, 191f)、それゆえ Martin も指摘するように表現主義には、自己規定性を含意するような、絶対的な必然性の理解には至り得ないという限界もあると言える (cf. Martin 2012, 10)。

⁸ ここから導かれる、物の定立とともに、論理的矛盾を生じさせる可能的規定の全体が、不可分に廃棄される、という原理の内に、批判期のカントは前批判期と同様に、「存在論的証明」の伝統的な証明根拠が否定される事態を見ている (cf. Abaci 2019, 232f.; 久保 1987, 382f)。

⁹ それを象徴するのが、後に見る、実在的な観点から百ターレルの現実性と可能性を同一視するカントの主張である。カントの様相論はこの点で、前述の「共外延性」テーゼを支持するヴォルフの見解の延長線上にあるものと見なせる (cf. KrV, A230f./B282-4; Abaci 2019, 201)。

¹⁰ この両契機の喪失は「実在的可能性」を論じた際に予示されている (cf. GW11, 387)。

¹¹ この第一版「存在論」では、その内容の連関が取り去られることで、「その内容の必然性は廃棄されてしまう」(GW11, 46)、という様相論を見据える帰結が付言されている。更に第二版では、この「他のもの」との「連関」について、それが「とりわけ知覚する者」(GW21, 75)との間の「連関」であるという点が具体化される形で、修正が加えられている。

¹² ヘーゲルは最終的に絶対的必然性を、「自己自身を顕現させる (sich selbst manifestiren)」ものとも特徴付ける。既にヘーゲルが「絶対者」章註解で示唆するように、そこには恐らくライブニッツ主義的な実体の形而上学的理解が結びついており (cf. GW11, 378)、この点で最もあり得る思想的源泉はブルーケの「自己顕現 (Manifestatio SUI)」の概念であると考えられる。

[参考文献]

1. 全集

GW: Hegel, Georg Wilhelm F. 1968-. *Gesammelte Werke*, in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft, hg. von der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Felix Meiner Verlag. (※原文隔字体はイタリックで表す)

2. その他の著作

Abaci, Uygur. 2019. *Kant's revolutionary theory of modality*. Oxford University Press

Baumgarten, Alexander G. 1757. *Metaphysica*. Halle. (Meta)

Brandom, Robert B. 2015. *From Empiricism to Expressivism: Brandom Reads Sellars*. Harvard University Press.

Emundts, Dina. 2018. “Die Lehre vom Wesen. Dritter Abschnitt. Die Subjectivität”, in *Kommentar zu Hegels Wissenschaft der Logik*, Michael Quante und Nadine Mooren (ed.), Felix Meiner Verlag.

Kant, Immanuel. 2011. *Der einzig mögliche Beweisgrund zu einer Demonstration des Daseins Gottes*, Lothar Kreimendahl und Michael Oberhausen (ed.), Felix Meiner Verlag. (※『神の現存在の唯一可能な証明根拠』からの引用はアカデミー版全集の巻数にページ数を付記して行う)

———. 1998. *Kritik der reinen Vernunft*, Jens Timmermann (ed.), Felix Meiner Verlag. (KrV) (※『純粹理性批判』からの引用は慣例に従い第一版を A、第二版を B として頁数を付記して行う)

Knappik, Franz. 2015. “Hegel’s modal argument against Spinozism. An interpretation of the chapter ‘Actuality’ in the Science of Logic”, *Hegel Bulletin* 36 (1), 53-79.

Martin, Christian G. 2012. *Ontologie der Selbstbestimmung*, Mohr Siebeck.

Melamed, Yitzhak Y. 2015. “‘Omnis determinatio est negatio’ - determination, negation, and self-negation in Spinoza, Kant, and Hegel”, in *Spinoza and German Idealism*, Eckart Förster (ed.), Cambridge University Press, 175-96.

Schmidt, Klaus J. 1997. *Georg W.F. Hegel--Wissenschaft der Logik, die Lehre vom Wesen: ein einführender Kommentar*, Schöningh.

Stang, Nicholas F. 2016. *Kant's modal metaphysics*. Oxford University Press.

Wolff, Christian von. 1730. *Philosophia prima, sive ontologia [...]*, Renger. (Ont)

久保元彦, 1987. 『カント研究』. 創文社.

高山守, 2001. 『ヘーゲル哲学と無の論理』. 東京大学出版会.

滝沢正之, 2018. 「カントの様相論」, 『理想』700号, 64-81.

手代木陽, 2018. 「ヴォルフにおける「可能性の補完」としての現実存在」, 『ライブニッツ研究』第5号, 180-198.